

浅井咲乃／咲くやこの花インタビューvol.19

浅井咲乃(あさい・さきの)【平成 30 年度 音楽[ヴァイオリン]】



楚々とした佇まいとは裏腹に、ステージに立つと情熱的な調べで聴衆の心を捉えて離さないヴァイオリニストの浅井咲乃さん。1963 年、ドイツ・ハンブルクの姉妹都市の大阪で延原武春氏によって創設された、18 世紀音楽を専門とする室内楽団「テレマン室内オーケストラ」に 2008 年より参加、現在ソロ・コンサートマスターを務める期待の俊英です。とりわけ絶賛を浴びたヴィヴァルディの「四季」全曲、「ムガール大帝」の華々しいソロは 1st アルバム『ヴィヴァルディ ムガール大帝 四季』にも結実しています。近年はクライスラーを筆頭に、多数のロマン派・近代音楽にもレパートリーを拡張中。2013 年、チェンバロ奏者・高田泰治さんと結成したデュオも好評です。また、地域の文化振興にも尽力し 2011 年、大阪市浪速区の公認マスコット「なにわのヴァイオリニスト」就任。翌年、文化観光大使「728(なにわ)大使」へ昇格。2015 年より「浪速区文化親善大使」も務めます。1980 年滋賀県生まれ、大阪府枚方市育ち。大阪府立夕陽丘高校音楽科、および京都市立芸術大学音楽学部を卒業。2004 年、大学在学中に結成した京都室内オーケストラでバロックザール賞受賞。第 6 回神戸国際学生音楽コンクール優秀賞受賞。ヴァイオリンを池田真紀子、近藤昌子、高橋満保子、梅原ひまりに、室内楽を鷲山かをり、岸邊百百雄、J.W.Jahn に、バロックヴァイオリンを U.ブンディースに、バロック音楽の語法を延原武春の各氏に師事。2015 年、2nd アルバム「『よろこび』と『かなしみ』」発売。平成 30 年度咲くやこの花賞受賞。インタビューでは音楽との出会いから「こう見えて気は強いかも」といたずらっぽく笑う等身大の素顔にまで迫ります。

©取材・文・撮影＝石橋法子

「内気な子供時代。ヴァイオリンの練習より、読書時間の方が長かったかも(笑)」

ウィリアム・メレル・ヴォーリズ夫妻が創設した滋賀県の近江兄弟社幼稚園に学び、その後4歳から大阪へ。現在、「浪速区文化親善大使」も務められるなど、すっかり“なにわっ子”でしょうか(笑)。



そうですね。近江八幡の田舎育ちですが、普段活動しているテレマン室内オーケストラが大阪の街に根付いて愛される団体になろうというコンセプトなので。今回の受賞も楽団のみんなでいただいた賞なのかなと感じています。嬉しさと同時に、もっと頑張らなくてはいけない気持ちですね。

この度の咲くやの受賞会場でもあった大阪市中央公会堂は、テレマンの活動拠点のひとつでもあります。中之島から18世紀ウィーンの貴族文化であるサロンの雰囲気を味わっていただこうと、定期演奏会を開催されています。

モーツァルトたちの時代の音楽を当時のサロンの雰囲気そのままに聴いていただこうと、会場もホールではなく貴族の邸宅に招かれたような親密な空間を意識しています。中央公会堂のほか、歴史ある大阪倶楽部さんでも月1回演奏会を開いています。小さいオケだからこそできることかなと思っています。

授賞式では首席ヴィオラ奏者・姜隆光さんを伴奏に迎え、ディニク「ひばり」、サラサーテ「チゴイネルワイゼン」の2曲を披露されました。超絶技巧と優美な音色に会場中が聴き惚れました。やはり、あれほどの演奏は幼少期からの鍛練の賜物でしょうか。

ヴァイオリンは2〜3歳から習い始める方も多い中、私は5歳から始めました。あまり覚えてはいないのですが幼稚園で習った曲をピアノで再現して弾けるようになりたかったようで、その姿を見た母親が「音楽に興味があるのかな？」と。ちょうどお隣がピアノ教室だったので、最初は姉と二人でピアノから習い始めました。

楽器との出会いはピアノからだったのですね。

ところが、練習用のピアノを姉と奪い合ってケンカになるので、困った母親が先生に相談すると、ちょうど若いヴァイオリンの先生が出張レッスンに自宅まで来て下さることになって。そこからヴァイオリンを始めました。でも結局お互いやりたくなるので、二人ともピアノとヴァイオリンの両方を習って、練習は交互にという形で落ち着きました(笑)。



(笑)。どんな楽器も最初は単調な基礎の反復練習に苦戦するとも言われます。飽きずに続けられた理由は？

私もたぶん厳しい先生だったらやめていたかもしれません。でもすごく優しい先生で、一曲宿題をいただくと「1日3回は弾きましょうね」と。それも「1回目は昨日より下手くそ、2回目で昨日と同じぐらい、3回目で昨日より少し上手になるから」とすごく分かりやすかった。そこをを守ってきただけで、練習を嫌いになったり苦に感じることもありませんでした。その後は、曲が長くなれば必然的に練習時間も増えていったという感じです。小学生までは1日5分も練習していなかったと思います。

小学生の頃からコンクールに出場するような、プロ思考の生徒が集まる教室にあって、浅井さんはプロへの意識はまったくなかったそうですね。

全然なくて。お習い事のひとつという意識だったので、コンクールとも無縁でした。それが、中学2年生の頃に、大阪の公立で初めて「夕陽丘高校に音楽科が新設されるらしい」というニュースが大々的に報じられて。その時、初めてプロという専門の道も「面白そうかな」と意識しました。ピアノの先生がすごく教育熱心な方で、「あなたも(夕陽丘高校に)行くんでしょ?」と。「そうなのかな?」と半信半疑でしたが、「ヴァイオリンとピアノ、どちらを選択するの? ピアノなら今日から毎日4時間練習しなさい」と毎日のように言われて。最終的に「ヴァイオリンが良い」と宣言しました。

その後、夕陽丘高校の受験には見事合格されました。ヴァイオリンと決めてからは1日何時間程度の練習を?

それでもピアノもヴァイオリンも1日30~40分程度。1時間もやっていなかったと思います。



中学時代はクラシックを聴かれていたのですか?

全然。本当に小さい頃からヴァイオリン漬けではなかったもので、J-POP もたまに聴くぐらいで音楽にさほど興味もなく(笑)。部活にも入らずとにかく内気な子供でした。本を読むのが好きで、友達と遊ぶときも一緒に読書をしていたほど。当時は推理小説ばかり読んでいました。

ひとりの時間がお好きですか。

好きでした。当時は作家をひとり決めると、片っ端からその作家の本を読んでいました。例えば、赤川次郎と決めたら図書館で毎日6冊ぐらい借りてきて、全冊読破する。借りたら借りた分だけ読んでしまうので。ヴァイオリンの練習をしている時間より、本を読んでいる時間のほうが長かったと思います(笑)。

当時の読書経験が、いま曲を解説することにも役立っているのでは？

確かに登場人物の裏側の気持ちとかまで、空想するのが好きですね。今でも演奏する時は、作曲者がどういう気持ちで書いたのか、勝手な空想ですけど考えながら弾くのが好きです。

曲に思いを馳せると、昔の作曲家も身近な存在ですか？

そうですね。メロディを聴くと自分の中でストーリーが出て来てしまうので、すべて思い込みなんですけど、弾きながら泣いてしまうこともあります。テレマンに入るまで、バロックの世界はほとんど知らなかったのですが、今は業界的にも少しブームが来ているというか。私自身、その時代の楽器や奏法に触れ、彼らが生きていた時代背景や聴いていた音とはこういうものかなと、イメージを踏まえた上で演奏するようになったので、色々と幅を広げるきっかけになったと思います。例えば、ヴィヴァルディの「四季」には、ここで鳥が鳴くとか、詩が付いているので、テレマンの演奏会でも「ここは鳥の鳴き声」「ここでは嵐の風景を表現しています」といった解説をしています。でも感情的な解釈やイメージの説明は今までやったことがないので、今後機会があればすごくやってみたいです。



いつか浅井さんによるドラマティックな曲の解説が聞ける日も近そうです。夕陽丘高校卒業後は、京都市立芸術大学音楽学部へ進学されました。

本当は国公立に行きたくて東京藝術大学を受験しましたがダメで、運良く京都市立芸術大学に受かることができました。当時はプロになるイコール、オーケストラで弾くというイメージでしたが、夕陽丘高校ではまだ新設の学部だったこともあり、私の時代はヴァイオリンが2人しかおらず、全体練習は吹奏楽に少し弦楽器を足してという編成だったので。大学で初めて本格的なオーケストラを体験した時は、すごく感動しました。とくに初めて弾いたのがチャイコフスキーの「悲愴」だったので、本当に涙が出るくらい感動しました。オーケストラになると、それまでバリバリ練習されてきた一学年14人もの弦楽器奏者の方と一緒に演奏できるんだ！という喜びもありました。大学では弦楽四重奏から、弦楽アンサンブルまで、ずっと弾きっぱなしでした。

大学在学中に結成した京都室内オーケストラではバロックザール賞を受賞されています。

大学の創立記念でドイツで演奏させてもらう機会があり、そこでの演奏がすごく好評で。解散するのがもったいないからと、卒業後の今でも定期的に演奏会をしています。



スランプもなく、充実した大学生活を過ごされたのですね。

スランプもなかったですね。多分、皆さんが小さい頃にやってきたことを私の場合、高校に入ってから詰め込みに詰め込んで、巻き返していった感じなので。そこから伸びていったのかなと、自分では思っています。練習もツラくはなく、弾くことは楽しかったですね。

好きな小説家を決めたら全作読破するなど、とことん突き詰める性格ですか？

そうですね。負けず嫌いで気が強いなど、自分でも思います(笑)。いまあるこれが楽しい！と思ったら、結構突き詰めるタイプですね。反面、ものすごい面倒臭がり屋でもあるので、そこは極端かもしれません。こだわりは本当に強いので、例えば曲の中で一ヶ所気になり始めると、ひたすらそこばかり練習してしまう。大学時代は一応気を遣って周囲に言われるままにやっていましたが、でもやりたいことは曲げずに、個人の時間で練習していました。

大学卒業後の進路は、どのように決定されたのでしょうか。

みなさん結構な割合で留学されたり、オーケストラの面接を受けたり。でも、私は臆病でのんびりした性格でもあるので、留学や大学院へ進みたい気持ちもなく、フリーランスとして何とかやっていけるだろうと楽観視していました。

フリーという選択も、留学と同じくらいメジャーなこと？



そうですね。留学しても帰国すれば結局はフリーとして活動するので。フリーは人との繋がりでお仕事をいただく部分が大きいので、繋がりを大事にするなら日本にいた方が良いのでは、という思いもあり、日本での活動を選択しました。

卒業後は思い描いた通りに？

そうでもなかったですね。でも、フリーとして色んなオーケストラのエキストラに行きながら、人との繋がりで音楽教室の講師も務めるようになりました。多い時で生徒数も20人ぐらいまで増えました。教えることも楽しかったのですが、でもやっぱり演奏をメインにしたかったので。フリーを続けるか、どこかのオーケストラに所属するか。思い悩んでいる時に、音楽教室の方から「正社員になりませんか」と。

おお！

やっぱりフリーって、どこかフリーターのような引け目も感じていたので。ここで定職に就くべきかと、決めかけていた時に、今度はテレマン室内楽オーケストラ代表の延原(武春)さんから「うちで弾けへんか？」とお声掛けいただきました。

事前にご相談されていたんですか？

全然。それまでテレマンでは3年ぐらいエキストラとして活動していました。どうもその間も気に掛けて見ていて下さってみたいで。よく弾けるけど留学するでも、どこかのオケに所属するでもない。「あんたこれからどうすんねん？」と。やる気があるなら、「うちでソロとしてやってみないか」と、ヴィヴァルディの「四季」の練習に誘っていただいて。通っていると「一ヶ月後に本番があるから」とその演奏会で弾いたことが、テレマンに入団するきっかけになりました。

ソロとしての活動は、いかがでしたか。

楽しかったですね。ソロって全然違う世界だなと思いました。オーケストラは自分がどう弾きたいかより、人がどう弾きたいのかに合わせるものなので。弦楽器は楽団のコンサートマスターに合わせ、コンサートマスターが指揮者の意思に合わせる。でもその“合わせる”ということがスゴく怖くて。少しでも間違ったらどうしようと萎縮してしまい、オーケストラではのびのびと弾くことができませんでした。それもあって、当初は合わせる音楽が自分に務まるのかと、入団に躊躇する思いもありました。



逆に、合わせる事が好きな演奏者もいるのですか？

そうなんです。合わせた上で、自分も楽しんで弾ける方もいます。私は少し不器用だったんだと、細かい所に神経質になりすぎるので。それが、ソロだと自分のやりたい音楽を自分の音で弾ける。やっぱりすごい喜びがありました。本当に良い場所を与えていただいたと思います。

「大阪でも“知る人ぞ知る”楽団なのが悔しい。小編成の良さを広めたい」

バロックからベートーヴェンまで、18 世紀音楽を専門とするテレマン室内オーケストラ。プロのオーケストラとして初めてサントリー音楽賞を受賞、ベートーヴェンの「第九」を世界で初めて作曲者の意図したテンポで演奏し、その記録を世界的指揮者のガーディナーやホグウッドが参考にするなど、その後の「第九」の世界的な潮流を作ったと言われる、唯一無二の楽団です。代表の延原武春氏は、ドイツ連邦共和国から功労勲章を授与されました。バロックと現在主流のモダンでは、楽器、譜面、奏法、すべてにおいて異なるそうですね。



バロック楽器は弓の形から張力まで違うので、音も半音違ってくる。例えば今で言う「ラ」が当時は音階としては「ラ♭」なので。「譜面に書かれてある音符と、聞こえてくる音が違う！」と、ずっと絶対音感でやってきたので混乱してしまいました。

ゼロから学び直す感じ。

そうなんです。入団してから3年ぐらいはずっと演奏するのが怖かった。やってやるぞというより、やるしかなかったですね。入った以上「できません」とは言えなかったのです。一時期怖くて楽器が弾けなくなったこともありました。バロックのそういうルールもあまり知りませんでしたし、それまで好きに弾いてきたので。「そうじゃない」と言われた時に、どう弾き方を変えたらいいのか分からなくて。自分が迷っていると、演奏会で弾くのも怖くて。入団して2年目ぐらいが一番苦しい時期で、突発性難聴にもなりました。

どのように困難を克服されたのでしょうか。

やはり、お客様としてはこちらの悩みとかバロックがどうだとかは関係なく、ただ「良い音楽を聴きたい」という思いで来られているので。奏法に悩むのは練習の時だけにして、本番は割り気って楽しもうと。そこから、多分強くなれたんだと思います。絶対にこう！ではなく、自分なりのバロックで良いのかなと。延原さんともぶつかりまくって、「もう無理！」となったこともありました。生意気だったと思いますが、延原さんはやはり懐の深い方なので。本気でぶつかって色々アドバイスもいただく中で、自分を探してみたいな感じでした。



穏やかな笑顔の影で、壮絶な体験をされてきたんですね。

どうしても弾きたかったので、遅くないと弾けなかったなと思います。

やはり練習は毎日されるのですか。

1日弾かないことも多々あるんです。でも、2日以上はないですね、怖いので。だから、旅行とかはちょっと行けないかな。思いつき暇な時に行こうとは思いますが、なかなかそういう機会がなくて。ただ忙しい毎日でも1日のうちに音楽のことを考えているのは4、5時間程度なので。時間が空くと姉や妹と遊びに行きます。ご飯を食べたり、ショッピングするだけでも気分転換になります。美味しいものは何でも好きですが、とくに甘いものは好きですね。

では、納得いく演奏ができた日などは、自分へのご褒美にケーキを買ったり？

そういう時は、お酒を呑んで帰るかも(笑)。一番好きなのが日本酒です！

いま瞳の色が変わりましたね！



本当に分かりやすいと言われます。思ったこともすぐ口にして後悔するタイプなので。最近はとくにすぐ言っちゃうかも(笑)。

苦労して体得されたバロック音楽ですが、中でも一番の収穫は？

当時の楽器は物理的な制約もあり、モダンと同じようには弾けないので必然的に音色も違ってくる。そうやって楽器から教えられることも多いので。譜面にあるこの音は、この楽器だからこそその音なんだというのが見えてくる。そういう発見がいっぱいあって。逆にバッハをモダンで弾く時にも当時の演奏風景がイメージができるので、色々と音色にも幅が出せるようになったのかなと思います。

今後もバロック、モダンの二刀流を極めたいですか。

本心を言うと、バロックをやればやるほど感情の赴くままに弾けるモダンが恋しくなりますね(笑)。「ひばり」「チャルダッシュ」「ツイゴイネルワイゼン」など、ああいう心に訴え掛けるような楽曲が好きなので。それぞれの良さがあるんですけど。感動の種類が違うというか、ロマン派では涙が出るけど、バロックで泣くことはないのかなと。

何か音楽で表現しようとする題材が、変わったのでしょうか。

そんな気もするんですね。題材というか、バロック音楽は主に教会で演奏されたり、サロンでの食事の席で流れるバックミュージックというか。音楽主体というよりは、場ありきの部分も大きいので。貴族が作曲家に依頼して作る形式がほとんどでした。ただ、バッハの宗教音楽には深淵なテーマや人間の深い内面が描かれていますし、モーツァルトも恋や愛を題材とした曲もたくさん作曲している。そう考えると、どちらも題材に関係なく感情に訴えるものかもしれないですね。音楽は正解がないというか、発見だらけです。何度弾いてもその一回では消化しきれず、また次も挑戦しようと思えるので。



ご自身が思う、良い演奏とは。

作曲家が目指した音楽を再現するというのも、想像でしかないのです。そこに自分のイメージをプラスして、ある程度音として表現できて、なおかつお客様にその演奏が良かったなと思って貰えることでしょうか。自分が気持ちよく弾けても、伝わらないと意味がないので。

発表の場は必要ですね。選曲、練習、演奏会など、どの作業が一番好き？

練習ではあんなに良い感じで弾けたのに、何で本番ではこんなに弾けないんだろうということは何度でも経験がありますし。本番で弾けることは嬉しいのに、やはり緊張して楽しいと思えるまでには至らない。不思議なんですけど。弾き終わっても反省ばかりしています。始まる寸前が本当に怖くて、「この1音を出した瞬間から逃げられない…」と思ってしまう。でもそれが、弾いてるうちに、会場の雰囲気や音の響きで、自分自身が色んな良いものを与えられてると感じて、幸せな気持ちにもなる。だから、響かない会場だとツライです。何でこんな汚い音になるんだろうと、カんでしまったり。まだまだ全然修行が足りてません(笑)。

楽しい瞬間というのは、意外に限られているものかもしれません。

しんどいけど、楽しいとも思う。弾いている瞬間は、幸せと大変が交互な感じです。ただ、視線を合わせてアンサンブルで弾いたり、みんなで一斉に音を鳴らせるオーケストラの一体感も幸せに感じます。何より、皆さんに聴いて貰える中で演奏できることが、ありがたいですね。

今後の目標は？



テレマンのコンサートマスターとしては、より多くのお客様に来て貰えるような団体にしたいなと。大阪でもまだまだ“知る人ぞ知る”存在だと思うので、それが悔しい部分。大フィル、センチュリーなど大きなオーケストラにはない、小さい編成なりの良さがあると思うので、そこを広めたい。個人的には、バロック以外の活動をすることで、逆にバロック音楽を知り、テレマンに呼び込めるきっかけになるのではと考えています。そういう意味でもレパートリーを増やしたい。やっぱり実際に弾くことで曲の良さを実感するので。いま興味があるのはフランスの作曲家。ピアノを習っていたこともあり、独特の雰囲気があるドビュッシーなどに挑戦してみたいなと思います。

実際に演奏会へ足を運ばれると、ステージとの垣根なく鳴り響く音の迫力や、珍しい古典楽器の演奏に感激される方も少なくないそうですね。

大阪倶楽部では客席との距離が1メートルも離れていないので。お客様の表情が見える喜びと、怖さがあります。でも逆に今は客席が暗い方が怖いかもしれません。本当にいるのかなとか、どんな反応をされているのかが気になるので(笑)。テレマンでは延原さんの解説も面白いと好評で、やはりお客様の顔を見ながら会話されていますね。

テレマン以外のご活動は？

じつはカントリーミュージックの楽器でバンジョーの演奏者の方と知り合う機会があり、その方がクラシックに寄せて作曲してくれたオリジナルの曲を演奏したり、アドリブ合戦のようなこともしています。私はクラシック奏法しかできませんが、かえってそれが専門の方とは違う良さに繋がっているようで、異色のコラボになっていると思います。違いを含めて、音楽の楽しさを感じています。即興的な場面では、あたふたしているんですけど(笑)。

出合いのきっかけは？

音楽教室時代に、ギター講師の方がフラメンコの演奏もされていて、そこでの繋がりで一時期フラメンコの音楽をやっていたこともあるんです。もともと「ツィゴイネルワイゼン」など、情熱的なジプシーミュージックや民族チックな音楽がすごく好きですね。



テレマンだけでは収まり切らない部分が、今後もはみ出してきそうですね。

じつは 2nd アルバム「『よろこび』と『かなしみ』」では好きなロマン派の曲を集めて収録しました。音楽誌に批評が載ったのですが、ある批評家の方が「演奏は素晴らしいものだが、表現が音楽からはみ出してしまっている部分があり、そこは評価が分かれるところだろう」と書いてくださっていて。はみ出しちゃってみたいですよ(笑)。

(笑)。浅井さんのユニークな魅力を、咲くやでもイベントとして何か企画にできればと思います。2019 年もバロックからモダンまでご活躍が続きます。

中之島・中央公会堂では年 4 回、3 ヶ月に一回のペースで定期演奏会をしています。5 月は年 1 回ヨーロッパからお招きする首席客演コンサートマスターのウツラ・ブンディースさんが来日されます。バロックバイオリンの演奏者で、オールテレマンプログラムでお届けします。この日は首席ヴィオラ奏者の姜さんがバロック楽器でヴィオラコンチェルトを演奏されるの、そこもすごく楽しみです。7 月は少し面白い切り口で、「本当は仲の良かったモーツァルトとサリエリ」という企画を計画中。映画などでのサリエリは悪役として描かれますが、本当は違うんだよと。当日はサリエリとモーツァルトの合作曲などを取り上げる予定です。延原さんも面白く解説してくれると思います。また、テレマンでご好評いただいている、ヴィヴァルディの「四季」全曲は、兵庫や奈良などの地方で演奏することが多いので、皆さまの地元へ伺った際は、足を運んで貰えると嬉しいなと思います。

★大阪名物を訊く！【私の、咲くやこの花賞】……

人と人の距離の近さとか、ならではの雰囲気は好きですね。お客さんの反応も温かいので、演奏会終わりに「よかったよ」と気軽に声を掛けて下さいます。電車でも普通に面白い会話が耳に入ったりしますし、お笑い文化も好きですね。あとは、日本テレマン協会が定期演奏会を行う中之島の中央公会堂も素晴らしい。100年の歴史がある建物を見るだけでも価値があると思います。そこに音楽が流れると、一段と特別な空間を感じられるんじゃないかなと思います。



【日本テレマン協会】<http://www.cafe-telemann.com/>